

平成26年度鎌倉稲門会総会 講演会記録

講師：鎌倉稲門会会員（昭和46年法学部卒）で、写真家の原田寛氏。

演題：「鎌倉観光の特性～奈良・京都と比較して」

講演要旨：「・・・古都専門の写真家という視点で、・・・つい見落としがちな鎌倉の魅力と、とくに奈良・京都という古都と比較して、あぶり出していこうというものです・・・」

講演は、講師夫人が助手として正面スクリーンに写真を投影し、講師がこれを解説するという形で進められた。

まず奈良・唐招提寺、京都・南禅寺、鎌倉・建長寺の柱の比較から始まり、そして奈良の写真が続く。入江泰吉の世界にもある「やまのべの道」。大和三山、桃畑の広がる藤原京。大浦の滝桜（又兵衛桜）と桃畑。仏立寺の千年桜。奥かけ道の先の、行者返し山の桜。自然に恵まれているのが奈良の特徴だ。スケールが大きい長谷寺は、境内中が春には桜、秋には紅葉。女人高野といわれる室生寺は、鎧坂の石段の両脇に一面のシャクナゲ。階段を上りつめた所にまたシャクナゲ。

葛城山は奈良と大阪の境。5月末には全山がツツジでまっ赤になる。鎌倉の安養院が数百本だとすれば、ここは一万本。

奈良駅から2時間くらいの川上村は山の斜面に1kmも杉林が広がる。その足下が一面姫アジサイ。少し天気が悪いと沢すじから霧があがってくる。写真を撮る人以外は行かないところだが、幽玄な雰囲気を感じ出すパノラマだ。

談山（たんざん）神社は、奈良一の紅葉の名所。日本唯一の木造十三重塔（国宝）がある。奈良の写真からは、大地に広がる雄大な雰囲気を感じることができる。

京都は丹（に）塗りが象徴している。北野天満宮は、日本三大天神の一つ。その紅梅は、いかにも京都らしい匂いがする。賀茂別雷（かもわけいかずち）神社は、別名上賀茂神社。葵祭りで有名。京都は紅しだれが多いが、ここは原種に近い山の桜が植えられている。

賀茂川の両側は桜並木。片側には夏場は川床の風景が見られる。ここを上に行くと紅しだれ桜。京都を代表する桜だ。

平安神宮の池の周りはずべて紅しだれ桜。庭の手前には、丹塗りの建物と紅しだれ桜の京都らしい取り合わせが見られる。平野神社は、会社帰りに花見をするには恰好の場所。桜の種類が多い。教王護国寺は、通称東寺（とうじ）。京都一高い五重塔があり、これと背比べをするようなしだれ桜。円山公園のしだれ桜は一時だいぶ衰えたが、樹木医を入れて、勢いを取り戻してきた。宇治の近く、三室戸寺はアジサイとツツジ。一つの斜面がアジサイで別の斜面がツツジ。鎌倉の明月院や長谷寺のアジサイは2千5百から3千株位だが、ここは1万株以上。吉峰寺の秋は、山全体が紅葉する。今年の「そうだ、京都へ行こう」

の源光庵は、悟りの窓、迷いの窓の奥に紅葉だ。名月院の円い窓の原型はここにある。

写真は、ここから鎌倉。瑞泉寺に咲く水仙1株のアップからスタート。日本の名庭といえば竜安寺、天竜寺。瑞泉寺庭園は、夢窓疎石が天竜寺より前に作った。

足利尊氏が一時蟄居した浄光明寺の不動堂前には、梅の木。鎌倉には桜より梅がよい。桜はマッサ（群生）、梅は一枝ごとをめでる。英勝寺仏殿前の梅はその代表的な梅だ。妙本寺のカイドウは、小林秀雄と中原中也と一緒に見た梅の三代目。海蔵寺の梅は、樹勢が立派で花付きがよい。浄智寺の参道は鎌倉石。両脇のシャガが、鎌倉らしい光景だ。妙本寺の修復された二天門の近接写真。奈良・京都とは違って、鎌倉は部分部分をいかにして独創性を出して撮っていくことかが、重要だ。鎌倉で自慢できるのが、建長寺の柏楨。奇跡的に760年も生き延びてきた。名月院のアジサイは、境内に植えてから観光客が増えた。アジサイを植えると人が来ると、全国的にアジサイを植える原点になった。安国論寺のイチョウは、朝一番で行くと太陽の光が当たって葉が透けて美人に見える。奈良・京都でイチョウの一枝を撮ることはない。掃除前だから、落葉もある。こういうごちんまりとした風景が、鎌倉だ。長勝寺の法華三昧堂は、室町時代の建物。屋根の反りが美しい。円覚寺居士林前の紅葉は、緑から赤になる季節感のうつろいだ。

ここから建物の観点で、奈良・京都を見る。興福寺の五重塔、法起寺の夕暮れの国宝三重塔。法隆寺の五重塔は奈良・京都を代表する風景だ。

奈良の南の奥、栄山寺の八角堂は国宝。誰も来ない所にもひっそりと国宝がある。唐招提寺の金堂の柱は礎石だけ。礎盤はない。春日大社の回廊も礎石だけで礎盤がない。奈良時代の素朴な古い時代の建築だ。

千本格子や竹やらいは京都ではいくらでもある。奈良では同じ千本格子でも京都の洗練さではない、素朴な美しさが見られる。

大覚寺の蟬錠は、金色の錠前飾りだが、英勝寺の蟬錠は、足がもがれ、錆が出ている。この味わいが鎌倉だ。

東大寺の大仏は、大きな法要がある時に扉が開かれて外から見るができる。このときに撮ったカットが有名。鎌倉の大仏は露座。大仏殿の見事さをうらやむのではなく、月と大仏の組み合わせが撮れる。雁行寺極楽房には千3百年前の瓦が今に残っている。妙本寺の瓦は棧瓦（さんがわら）。瓦屋根としては鎌倉一だが、民家で使う瓦だ。京都は本瓦。棧瓦は軽いから、柱は細くてもよい。円覚寺の舍利殿の柱は華奢。元は尼寺の太平寺の仏殿。土門拳の舍利殿は茅葺きだった。のちに元のこけら葺きに戻した。

ここからテーマが道が変わって、まずは奈良の道。額田王の時代、山辺の道、自然探索路。すぐそばの田圃が奈良らしい。京都は祇園白川。巽橋は祇園を代表する。鎌倉は、大仏の小道。大仏のゲストハウスの塀が黒く塗られ、隣りもそれに合わせた。京都の高桐院は妙心寺の塔頭。人工的な参道だが、鎌倉中探してもこんなに美しい参道はない。清凉寺の隣の宝篋院はセンスの良さが光る

石の参道。京都らしさを出している。鎌倉の参道は、まずは桂敷きの寿福寺。落葉の時期が最も美しい。続くのは常楽寺の参道だ。

大池越しに見た薬師寺東塔、西塔、本堂。後ろに若草山。塔間から上る朝日が狙い目で、名所中の名所だ。檜原神社は、伊勢神宮の元。ここの鳥居は貫がない。こんにちの鳥居の原型であろう。春秋分の日、真西方向の一乗山のこぶのあいだに太陽が沈むように建てられた。

聖徳太子生誕の地、橘寺は稲作の原点。山門のすぐそとに田圃というのは、鎌倉にも京都にもない。

それぞれの都市の一番デフォルメしたところを見ると、奈良は大寺。京都は丹塗り。清水寺の山門、伏見稲荷大社の千本鳥居、貴船神社。平安神宮も朱塗りの建物。春3から4月だけだが、枯れ木に結びつけるおみくじが、この季節だけピンク色になる。こういう京都のセンスがよい。祇園のお茶屋・一力の壁、千本格子、犬矢来。京都の町を代表する美しい光景だ。智積院は仏旗（五色幕）の写り込みが美しい。上賀茂神社の立て砂は飲食店が塩を盛ることの原型であろう。砂を盛っただけでもこんなにも美しい。嵯峨野の竹林も見事。祇王寺は紅葉の季節でもコケがきれいだ。光悦寺の垣根は全国的に有名になった。宝篋院は京都一紅葉が美しい寺とも言われるが、写真はそこのお堂の中から見た紅葉。

講演の締めくくりは、鎌倉の海と富士山。光明寺の山門、その向こうに海と富士山。成就院のアジサイの参道、その奥に弓なりにのびる由比ヶ浜。稲村ヶ崎の朝は三浦方向から日がでてくる。和賀江島、江ノ島、稲村ヶ崎、富士山。4月の初めと9月の初めに富士山の頂上に太陽が沈む日がある。

今回の講演は、数々の写真を通して奈良、京都と比較した鎌倉の魅力を十分感じとることができるものであった。（小林記）